論 文 内 容 の 要 旨

氏　名	呉婷
論 文 題 目	日本語と中国語の存在型アスペクトに関する対照研究 ―シテイルを基本に―

要　旨

本論文は，日本語と中国語のアスペクトを対象に文法形式とそれが表す意味の関係を解明しようとするものである。アスペクトの概念的な意味は個別言語を超えてかなりの程度共有されるものと考えられるが，アスペクトの意味を表す形式の在り方は言語間で差異が認められ，文法形式とその意味の対応関係に関する言語間の異同を明らかにしようとする対照研究における重要な課題となっている。言語間の異同を追究する対照研究は，外国語教育への応用という点でも少なからぬ意義を有する。日本語話者に対する中国語教育においても，「在」と「着」の使い分けや「了」の用法など，アスペクト表現の使用は学習上の大きな課題であり，日本語話者に対する中国語教育への貢献という点も本研究の動機となっている。

アスペクトを表す文法形式のなかで本研究の基盤をなすのは日本語の「シテイル」という文法形式である。日本語のアスペクト形式を代表するシテイルは，進行・反復・結果・パーフェクトという広範なアスペクト的意味を表す点が第 1 の特徴である。シテイルのもう 1 つの特徴は，その形式が存在動詞「イル」を後接させる動詞複合の形態を取る点である。そこには，存在動詞の文法化の問題が深く関わっている。シテイルに見られるこのような特徴から，中国語との対照研究のための具体的な重要課題が浮上してくる。すなわち，1 つは日本語のシテイルに認められる進行・反復・結果・パーフェクトの意味が中国語においてどのような文法形式によりどのように表されるのかという課題，もう 1 つは存在動詞の文法化が中国語においてどのような様相を呈するのかという課題である。

そのような課題に基づき，本論文が掲げる目標は，第 1 に，アスペクト（進行・反復・結果・パーフェクト）の意味を表す日本語と中国語の文法形式の在り方を存在動詞の関与という点を中心に比較対照すること，そして第 2 に，存在動詞の文法化が日本語と中国語のあいだでどのような現れ方の相違を見せるのかを検討することである。本研究では，日中対照研究のさらなる深化を目指し，中国語については標準中国語に加えて申請者の母方言である広東方言も考察の対象とする。本研究における中国語は，したがって，標準中国語と広東方言の 2 つを指している。

上記の目標のもと，本論文は 2 つの課題を中心に以下のように構成される。まず第 1 章において，本研究の目標を提示したうえで，関係する先行研究を概観する。第 2 章では，本研究で用いられるアスペクト体系とそれに関係する動詞分類について概説する。それに基づき，第 3 章から第 7 章にかけて上記の 2 つの課題が取り上げられる。第 1 のアスペクト形式に関する日本語と中国語（標準中国語と広東方言）の比較対照という課題については，進行相・反復相・結果相・パーフェクト相に分かち，それぞれの相に関して第 3 章から第 6 章で考察する。それに続く第 7 章において，第 2 の課題である存在動詞の文法化をめぐって日中対照研究の観点から検討する。

以下，章別にその概要を記す。

第 1 章「序論」では，本論文の研究目的とその背景を記したうえで，それに関係する先行研究を精査し，そこにどのような検討課題が見出されるかが述べられる。併せて，その検討課題に基づいて本論文がどのように構成されるかが説明される。

第 2 章「本研究の枠組みと研究方法」では，先行研究におけるアスペクト体系とそれに関係する動詞分類の見方を検討したうえで，本研究が用いるアスペクト体系と動詞分類が示される。また研究方法については，アスペクトを表す文法形式（「アスペクトマーカー」）の振舞いを収集された多くの言語資料により観察・分析するという実証的な方法を取ることが説明される。

第 3 章「日本語と中国語の進行相」では，日本語と中国語の進行相をめぐって，進行相の下位類である事態継続と期間継続の関係を中心にアスペクトマーカー（日本語のシテイル，標準中国語の「在」・「着」，広東方言の「喺」）の振舞いが観察・分析される。併せて，動詞分類について，「動きの過程性」の有無という点が動詞の語彙的アスペクトの観点からは重要な意味を持つことが指摘される。

第 4 章「日本語と中国語の反復相」では，日本語と中国語の反復相について，進行相を表す日本語のシテイル，標準中国語の「在」，広東方言の「喺」が反復相を表し得るという点が動詞との組み合わせをもとに詳説される。そこでは，第 3 章で取り上げられた事態継続と期間継続の区別に対応するものとして，事態反復と期間反復の区別という観点が提案され，その区別をもとに，進行相と反復相のあいだの有機的なつながり（連続性）が明らかにされる。

第 5 章「日本語と中国語の結果相」では，日本語と中国語の結果相について，標準中国語の「着」と広東方言の「住」を中心に日本語のシテイルによる結果相と比較対照される。結果相をめぐっては動きの変化―動詞で言えば，「変化動詞」―の問題が重要な検討課題となるが，この章では，変化動詞における変化の在り方を掘り下げて考察している。すなわち，変化時よりも変化の結果状態に注目する「R 型動詞」と変化の結果状態よりも変化時に注目する「非 R 型動詞」の区別を重視し，その区別をもとに，日本語と中国語の違いを論じている。

第 6 章「日本語と中国語のパーフェクト相」では，日本語のパーフェクト相に対応するものと考えられる中国語のパーフェクト相の表現を対象として，標準中国語と広東方言のアスペクトマーカーの用法が観察される。そのなかで，出来事の効力が参照時点に明瞭に及んでいることを表す「存続パーフェクト」と，以前の出来事が参照時点で経歴として残っていることを表す「経歴パーフェクト」が区別されるとの見方が提出される。

第 7 章「日中存在動詞の文法化について」では，存在動詞がアスペクト形式にどのような関わりを見せるかという点をめぐって，文法化と呼ばれる言語変化の観点から考察がなされる。文法化の考察に当たっては，言語変化を明らかにするための言語資料の収集・分析が必要となるが，この章では，日本語についてはシテイルにおける「イ抜き」の現象，標準中国語と広東方言については「在」と「喺」の変遷がそれぞれ詳しく吟味される。そのうえで，存在動詞の文法化について「日本語＞標準中国語＞広東方言」という程度差が認められると主張している。

第 8 章「結語」では，本論文における日本語と中国語のアスペクトに関する考察の成果を整理して示すとともに，今後に残されたいくつかの課題を提示する。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　名	呉婷
論 文 題 目	日本語と中国語の存在型アスペクトに関する対照研究 ―シテイルを基本に―

要　旨

本論文は標題に示されるとおり，日本語のアスペクト形式を代表するシテイルを基本に据えて中国語（標準中国語と広東方言）のアスペクト形式と比較対照することを主眼としている。日本語のシテイルというアスペクト形式で注目すべき点は，存在を表す動詞「イル」を用いた文法形式であるという点である。「存在型アスペクト形式」と称される所以である。本論文が日本語のアスペクト形式のなかでシテイルに目を向けるのは，第 1 に，アスペクトに関わる広範な意味（進行・反復・結果・パーフェクトの意味）の領域がシテイルという 1 つの形式によって表される―それゆえ，シテイルを取り上げることでアスペクトの形式と意味の関係を幅広く考察することが可能となる―という点に，そして第 2 に，基幹的語彙資源である存在動詞の「イル」がアスペクト形式の形成に与る―それゆえ，存在動詞の文法化という重要課題に取り組むことが可能となる―という点に，その理由が存する。

日本語のシテイルにおける進行・反復・結果・パーフェクトの意味を表す中国語のアスペクト表現には多くの形式（「アスペクトマーカー」）が関係し，そこでは存在動詞に由来する形式も見出される。したがって，日本語のシテイルを基本において中国語のアスペクト形式を考察することで，中国語のアスペクト表現を広範に検討することが可能となり，存在動詞がアスペクト形式の形成にどのように関与するかという存在動詞の文法化の考究にも有効である。また，日本語のシテイルを中国語の様々なアスペクト形式に照らし合わせて考察することにより，シテイルが表すアスペクトの意味の研究にも新たな光を当てることが期待できる。

特筆すべきは，考察の対象に申請者の母方言である広東方言を加えた点である。従来のアスペクトに関する日中対照研究においては，日本語と標準中国語を比較対照するものが一般的であった。本研究が考察の対象に広東方言を加えた点は独自性が認められるところであり，日中対照研究における新たな試みとして高く評価される。

評価すべきより具体的な点として，以下の点が挙げられる。

第 1 に，日本語のシテイルと中国語の存在動詞に由来するアスペクトマーカー「在」（標準中国語）・「喺」（広東方言）との比較対照を通して，進行相と結果相の概念的区別を明確に示した点である。また，存在動詞以外の動詞に由来する標準中国語のアスペクトマーカーとして「着」を取り上げ，前接する動詞との連用の実相を分析し，「着」が進行相と結果相に跨って使われることを指摘した点も注目される。

第 2 に，様々なタイプの動詞を詳細に観察・分析することにより，進行相と反復相の関係性を明らかにした点である。日本語のシテイルの有り様は進行相から反復相への派生を予測させるものであるが，事態反復と期間反復の区別の観点から，中国語においても存在動詞に由来するアスペクトマーカーである「在」・「喺」が反復相を表し得ることを具体的に示した点は，高く評価したい。

第 3 に，結果相とパーフェクト相の関係を検討するなか，変化動詞における変化の在り方に基づく「R 型動詞」と「非 R 型動詞」の区別を提案したうえで，その区別をもとに，日本語と中国語の違いを指摘した点が挙げられる。また，中国語のアスペクトマーカーの現れ方をもとに存続パーフェクトと経歴パーフェクトを区別する必要があることを示した点も重要である。

第 4 に，存在動詞の文法化をめぐって，存在動詞に由来する日本語のシテイルが進行・反復の意味領域から結果・パーフェクトの意味領域にまで及んでいるのに対して，存在動詞に由来する中国語のアスペクトマーカーは基本的に進行・反復の領域に留まっているということ，さらに，中国語のなかでは，標準中国語のアスペクトマーカー「在」のほうが広東方言の「喺」よりも文法化が進んでいる（広東方言の「喺」は存在の意味を払拭し難い）ということを主張した点が挙げられる。日本語の存在動詞の文法化に関わる「イ抜き」（「シテル」という形態）の現象や標準中国語の存在動詞の文法化に関わる具体的な言語変化について多くの言語資料を用いて実証的な分析を行った点も評価される。

最後に，今後に残された課題に触れておきたい。

本論文の第 8 章で申請者自身も述べている点であるが，日本語アスペクト研究の進展に資するための，中国語との対照研究に基づく日本語の存在型アスペクト形式の研究に対するより具体的な問題提起が求められる。

また，存在型アスペクト形式の文法化をめぐって，存在動詞の変遷，存在型アスペクト形式の変遷という史的変化をより詳しく検討することで，文法化研究を深化させることが望まれる。

さらに大きな課題としては，存在型アスペクト形式の原点とも言える“存在”の概念に立ち戻って，“モノの存在”，“デキゴトの存在”というものをどう捉えるべきかという問題を再考することが挙げられる。そこではアスペクトの問題をはじめとする様々な重要課題が見出され，今後の研究への新たな展望も開かれるであろう。

以上述べたとおり，本論文は言語間の関係を見る“ヨコ”の視点と言語変化を見る“タテ”の視点の両面から当該の課題に取り組んだ意欲的な研究であり，博士論文に求められる水準に十分に到達しているものと判断される。今後の研究により本研究のさらなる進展が期待される。

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	益岡隆志
副査	教授	靳衛衛
副査	教授	柿木重宜

最 終 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　名	呉婷
試 験 科 目	
判　定	(合　格)・　不 合 格

要　旨

学位申請者の研究成果を審査するため，2020 年 6 月 25 日に，本博士論文を主たる対象として公開の口述試験を実施した。

口述試験では，本論文の内容に関する申請者の報告に続いて，申請者と審査委員のあいだで本論文の目的・意義，論点・結論，論述の構成などについて質疑応答が行われた。審査委員からの質問に対する申請者の回答は十分満足し得るものであり，本論文の成果が高い評価に値するものであることが確認された。とりわけ，日本語との対照研究で取り上げられることの少ない広東方言に関する分析の内容や研究の意義をめぐる質疑応答は，有意義なものであった。

申請者の外国語の試験については，日本語で執筆された本論文と日本語・英語・中国語で書かれた要約における表現力により判断し，試験を免除した。

以上の点を総合的に判断した結果，本審査委員会は全員一致で，本論文に対する博士（言語文化）の学位授与を適格と認め，合格と判断した。

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	益岡隆志
副査	教授	靳衛衛
副査	教授	柿木重宜